

# 「20世紀末症候群の諸相」

—その社会形成原理のゆくえについて—

商経学科 助教授 大 島 俊 一

## 序

1. イデオロギーなき社会秩序
2. ピーターパン・シンドローム
3. 人間類型の変遷について
4. カオスの功罪

終章 ジャパニーズ・マネジメント

## 序

昨今の日本社会の変化について様々な識者が、自己の専門的立場からの発言を試みている。今、こうした現象の分析対象を考慮する時、ある共通した事項、あるいは変化の措定範囲が、上は国家から下は個人（個人主義）へと繋がる領域に及ぶものが優勢を占めているように思われる。曰く、国家の衰亡、企業内人間関係の変貌、イエ社会の構成基盤たる「家」そのものの変質、そして個人主義の行き過ぎとも思える自己中心主義(Me-ism)の抬頭といった指摘が、農業社会から工業社会への進展度を示す近代化の中で、新しい個人主義の動向を生み、産業社会から脱産業社会へと向う社会の中で、新しいモデルの誕生を摸索している。

こうした状況にあって、将来の日本社会の動態を想起することは困難を極めるように思われる。それ故にまず、今日までの近時の社会変化（変化それ自体は新しい現象の普遍化の後に認識されるものであるが）、を大方の識者の方法に従って抽出し、これを整理してゆく中で、論点の展開を試みてゆくことにする。その端緒として、最近の著作物の中で特に印象に残ったものを紹介し、問題を検討してゆくことにする。

### 1. イデオロギーなき社会秩序

ウェブスターによると、文化とは「人の行動の総合的な形態であって、思考、言行および、人為結果を含み、人の学習能力と次の世代への知識の伝達能力とに依存する」ものとされている。それだけに現実世界では、人種集団と社会的移動の問題が加味され、他国の文化と自国のそれとの接触は、様々な文化的衝突を惹き起こしてきた。思想、芸術、医学、経済、政治、教育、そして企業経営のあり方に関しても、国民性の差異が明瞭な隔たりを相方に認識させてきた。中でも政治へのイデオロギー闘争は19世紀に始まり、宗教と政治の生活領域を

分離させ、伝統的政治形態を崩壊させて制度的体系を図る支配構造の確立を急いだ。その結果が20世紀に入ってから世界各地での内乱、独立運動へ気運を呼び、ついには世界大戦をも誘発させることになった。ダニエル・ベルは「イデオロギーの終焉」の日本語版への序文の中で次のように言っている。「イデオロギー政治は社会における明確なる社会諸集団の闘争を反映する。しかし、イデオロギーは一連の利害以上のものである。すなわち、イデオロギーは政治についての「情熱」<sup>パッション</sup>であり、強烈に保持されている一連の信念なのである」(p. 8)。これが全体主義を生み、独裁政治を生み出すことになる過程は実際驚く程早かったわけである。しかし、このイデオロギー闘争も第2次大戦後、その結果の反省から、国家再建への自立、共存共栄体制の確立への急務の陰に、一応の休止を得、1962年に、このダニエル・ベルの「イデオロギーの終焉」の出版によって、平和を確立するための市民のための政治への希求が喚起されることになった。ベルは言う、「わたしにとって『イデオロギーの終焉』とは政治における狂信主義と絶対的信念の終わりであり、一枚の青写真にしたがって、いとも容易に社会の改革ができるという「傲慢さ」の放棄なのである。イデオロギーの終焉は市民の秩序の始まりである」と。(・点筆者、p. 12)。

この市民的秩序の開始は、内部矛盾を含みながら、今日に至るまで「豊かな社会」を現出させ続け、物質文明、技術文化を育てながら国際協調路線を助長してきている。そして各国においては、一部の例外を除き、大衆社会の繁栄と安全保障とを円滑に進展させている。しかしながら、各国内部の状況は、今や伝統的価値の崩壊を余儀なくされ、さりとて新価値体系の創設すらなく、全くの価値の混乱、価値無化現象が起こり始めており、60年代、70年代、80年代という時系列を、端的に描写することが出来ない状況である。

これは日本の場合も例外ではなく、いやむしろ日本の場合、その現象は他国と比して極端なまでに現出していると言えるかもしれない。というのは、戦前までの天皇一元支配体制が、敗戦を契機にアメリカ的政治・経済システムの採用の前に、一挙に大転換させられ、再建過程の中で経済立国への到達を至上命令に全国民的レベルで改造・建設を急いだために、伝統的価値観や、文化的基盤すらも無視、排除した経験があるからである。特に米食から小麦食への主食比重の移行はアメリカの穀物メジャーの後楯を受けてGHQが日本の厚生省をも操作して強力に推進しただけに「アメリカ小麦戦略」(高嶋光雪著)、日本人の生活に一大変革をもたらし、生活意識すらアメリカ・ナイズされたことは、この時期の特徴の一つとして見逃がすことができない歴史的実験であった。「生産性第1」を目標に狂奔した結果、今日世界第2位の自由経済立国となったその背景には、内部に様々な問題を生み出した。公害による生活破壊、人命への危機の増大は、その際たるものとなった。犠牲の上の繁栄は、虚栄でしかない。その結果が今日の日本の現状ということになると思う。

「柔らかな個人主義の誕生」の中で、山崎正和氏は次のように述べている。「現在の条件から論理的に考えられる可能性のひとつを提示し、それによって将来を占ふというより、現在そのものを解釈するためのモデルを提供しよう」(p. 212)。これは氏の指摘する如く、過

去10年間の、つまり1970年代日本の同時代史である。一人の人間が、過ぎ去った時間を回顧して、10年を区切りとしながら、70年代の日本の特徴を抽出して、その上で明確に歴史的な枠組の中での変化を分析してゆくことは、冷静な眼と同時代人として旺盛な好奇心が必要である。山崎氏はその2つを兼ね備えた識者の一人であろう。

以下において、先ずこの著者の意図し、分析したテーマを吟味しながら、私見を展開してゆくことにする。

先ず第1に興味を抱いた点は、山崎氏が集団的社会の変質を大衆の意識変化に求めていることである。上からの意図的变化ではなく、日常性の中に自然発生的に生起してきた現象から解明しようとした点である。ただ、一般大衆にその意識変化をもたらした契機は、ダニエル・ベルの著わした「脱産業社会」という社会的現象に求めている。それだけに、国家的政治的立場からの総括的な変質に触れている。『「面白い」国家の終焉』の中で山崎氏は「国家はもはや、大きな目的をめざして動く戦闘集団ではなくなり、無数の小さな課題をかかえて、その間の微調整をはかる日常的な技術集団に変わってしまった」(p.22)と言及し、国家の存在自体が理由の変遷を明記している。国家の存在自体がこのように変化すると、「小さな政治」「安価な政治」への転換が実現してゆきそうなものであるが、現実はその方向にのみ終始しない。一面において、国家の変容は、すべての権威体系の失逐を惹き起し、その現象は1950年代から早くも進行し、しかも確実に傾向を蔓延させている。

集団組織の原基形態としての「家」、家庭の秩序の希薄化と職場・仕事への価値比重の減少は、長寿命化の進む社会の中で、確実に「人生の一回性」を意識させ、伝統的価値観からの離脱を促がし、一見無限定とも思える程の自由行為の選択をもたらしている。これは、一面において真の民主主義社会への里程標の役割を果しつつあるとも言えるかもしれない。「イデオロギーの終焉」の中でベルが「個人的諸要望の実現される機会と分配上の正義の原則とが存在する社会において、個人がある位置を占めているのだと感じる時にのみ、民主主義は可能である」(p.11)としていることに照らし合せてみる時、日本の現実はずしも悲観すべきものではなく、むしろ望ましい価値秩序形成への胎動期と規定できるかもしれない。

個人の中心となる価値規準は、自己の人生についての「トータル感覚」であって、個性の獲得、発揮を最優位におき、自分の人生の主役としての自立化を人生の目的とする生き方を容認させ始めているからである。

昨今著しく増加した女性の職場進出、それに伴う女性の地位向上化は、旧来の男性中心社会に対して決然と対抗しうる実力を示してきている。新旧交替はあらゆる場合に表われ、労働意欲は自己の実力向上へと至る段階として意識されている。とはいえ、今日の日本を支える中年層の意識は、旧価値の占めるウェイトが依然として大きく、若者文化の持つ「割切りの良さ」に俊巡することもまた大である。一方で「天命を知る」年は定年が身近となったことを告げるとされていた風潮が、人生の第2のスタートを意識される指針となったことは喜ばしいことであるが、他方ではこうした大衆の持つ功罪もまた、大きな時代的特徴を呈すも

のである。

今少し、具体的にこの点について考察を続けることにしてその波及するところを抽出してみる。

生活が本質上実践的であることから、第2の人生を自分のための時間とするサラリーマンは多い。これは系統発生を繰り返しながら人間としての責務を果たさなければならない存在である以上、止むを得ないことである。一応の資本蓄積の達成と、子育ての終了期より脱出する時期が、この第2の人生のスタート時であるからである。

50才代からの人生の「箱庭作り」、第2の人生の個性化、自己の経験と知識を異種の生活形態の中で実現し、社会的貢献を為そうとする欲求は、人を始めて解放し、自由という名に値する幸福な時間体験を個人に約束する。しかし、自立化への道は通常趣味領域の拡大から始まり、限られた経済性の中で日々の時間の移ろいの状態だけを迎へ、それで足る終日の繰り返しを肯定することから始まるようである。その日その日を充実させて生き続けることは、確かに人生の目的の一つであろう。殺那主義はこの点で肯定される。しかし、成熟年令に達してからのこうした日々の過ごし方は、ともすれば諦念を背にした殺那主義を呈している場合が多くみられると思う。何か確実に自分が達成でき、またある程度熟練もして、自足の境地を体感できることは喜ばしいことではあるが、生きることの緊張感と偶然性を回避してしまう無意識の倦怠を宿す危険性を有することも考えられなくはないだろう。

大人ばかりの社会が、知らず知らず没落への道を歩んできたことは歴史の教えるところである。遠くローマ帝国の衰亡を思うまでもなく、近くは米国のベトナム戦争の教訓はこの証左の一つである。戦争終結を実現させた真の勢力は、若者の反対運動の高揚だったのである。生への積極性の中の一つである若々しさ、冒険に自分の生死を賭けるという意気は、老成した人間集団の中には終に生まれ、助長されることはないだろう。ただ伝統的価値の実現と保守といった文化的円熟化は約束される。しかし、こうした文化の次代に及ぼす影響は、人生を抽象化した価値の集積と規定し（倫理観、道徳観といった思想先行型思考による人生解説）、本質上実践的行為の集積である人間の社会・時代形成、同時代人としての意欲と共感を殺ぐ傾向を包含してしまうことを否定することができない。食・住・衣への基本欲求の段階昇進が、住・衣・食という逆転した基本欲求と化す時、確かに人間は芸術という文化の園を手にすることができるけれども、生きてゆくための生活物資生産への労働は軽視されがちである。しかし、これは本末転倒である。「わがは長し、生は短し」という格言の意味は、明瞭に、人間の形質、本能、生命維持の限界を認識させ、人間の行動の具体性を現象の創造によって跡づけ、本質探求の諸手段、諸結果の認識を増々、抽象領域へと追いやる。抽象は夢を生み、夢は現実を魅了する。そして現実が幻想と化し、幻想は現実を夢幻の連鎖、集積と化す。ここに「豊かな社会」の有する落とし穴が存在している。

## 2. ピーターパン・シンドローム

タルコット・パーソンズは「現代のアメリカ社会学」の中で次のように述べている。「もし財産が中心的な経済制度であるとすれば、対応する政治的中心制度は権威である。権威は集合体の目標の利益のために、拘束する義務を要請する一般化された権利である。権威の行使のための一般化された手段がわれわれが技術的意味で権力と呼ぶところのものである。…現代における変動のもう一つのとくに重要な文化的源泉は科学の発達である。もちろんそれは、宗教のそのように、部分的には社会過程である」(・点筆者, pp. 325~327)。現代社会における科学技術の日常生活への浸透・普及は、本来の科学技術の進展の物凄さを知らせるに充分である。その結果としての反映が、今日の高度情報・通信システム社会に暮らすわれわれの生活を便利・安易化させ、大衆消費時代を現出せしめている。この消費への渴望は、人々の購求欲を増々高め、私有財産の種類は測り知れない程の物量となった。消費は新たな生産を期待し、新商品製造は企業者の最重要事項となり、無限の反復を強制する。消費者は他者と同様の商品獲得願望が充足されると、次には他者と異なる商品獲得へとその購買欲求をエスカレートさせ、ついには自分1人だけしか持つことがないオリジナル商品を手にしようと狂奔する。コピー商品が蔓延するこの大量生産機構を軸とした社会にあって、こうしたNeedsに合致した商品製造は、企業者間の過当競争を生起させ、技術開発に迫車をかけている。

しかしながら、こうした現状の中で、既製品の洪水の中で暮らす消費者は、一方でブランド商品を求め、個性的であろうとすればする程、結果として遠くの他者と同様の商品を所有し、一時的な所有欲求を満たすに過ぎず、「没個性化」した商品を取得しているにすぎなくなっているのが、客観的な状況である。既製品化されたものは商品のみならず、「ステレオ・タイプ人間」や「コピー人間」といわれる同様の思考・論理を行使・実現する人間集団を生み出していることは、流行語となって語られることによって、広く知られているところである。特に若者たちを対象にした場合、この「流行語」の主人公を務めるだけに、この現象は著しい。残念なことに、この方面の流行語は、現代社会の欠陥、病巣となっているかの響があるだけに、この現象は大方の識者にとっても見逃がせないものとなっているのである。

今日の流行語となっている若者中心文化から大人の幼児化現象まで、広範な領域に及びその意味は深長である。「青い鳥症候群」「ピーターパン・シンドローム」「モラトリアム人間」等は、職場、家庭、マスコミなどで日常語のごとくに使用され、現代語の代表ともなっている。しかしこの言葉は、社会の推進力たる成人の「大人」としての役割期待を裏切る言葉として、若干の好奇心と諦めにも似た肯定の意味を含んでいるだけに、実は恐ろしい現状分析の核をなす用語なのである。

確かに生産を中心とする社会が生み出した価値観は「前進あるのみ」とする拡大再生産構造を徹底し、人間を構造の中に支配してきた。それに対し「脱産業化時代」に直面した現代社会が、生産の最終目的である消費の側から、人間の消費文化を規定し、消費こそが生産を規定するとして、個性的商品生産を達成し始め、企業も多品種少量生産へと移行せざるを得

なくなった。旧来の少品種大量生産が、製品の格一性、生活の等質性をもたらし、終には教育にまで及ぶ「盆栽型」の形式的没個性化人間を生み出したことを思えば、最近の消費者の商品選定にける行動は、一見個性の回復化傾向を思わせる。しかし、個性 (Personality) とは、本来他者との絶対的差異性を強調するものではなく、多数の人間の間であって同質の価値をより以上に高める行為、行動によって裏付けられるものである。ここに人間と社会と自然契約にも似た価値秩序の安定があったのである。

社会という自分の側からみた他者の集合体と、自分との優越せる接点の一つが、個性的生産、自己超出を約束するものである。それ故に個人主義という言葉の意味は、人間の歴史的現象の中で、それ自体時代性を持ち社会性を表現する。歴史という大河の中にあって個性や個人という市民権を得るための努力は、今日の世の人々の自己表現努力の傾注とは異質なまでに、生まぐさい過程の中で生誕の声をあげ、それだけにその獲得のために流した血の代償という一面を保持しているのである。言葉そのものの持つ時代性についての配慮が必要なのである。

西洋におけるカトリック (旧教徒) とプロテスタント (新教徒) の分離・独立への戦いは17世紀に始まり、宗教戦争の中で恐るべき大量の殺し合いをしてきたが、結果として、社会内部において成長しつつあった市民階級 (仏国の場合、シェイエスの言った第3身分) の抬頭を喚起し、ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の主演となった中間的生産者層の両極分解を通じて、労働を罪意識から分離し、営利を追求するひたむきな努力こそが神の恩恵に應えるものであるとするプロテスタンティズムを増々助長し、経済人たる市民階級の勝利のもとに近代社会の実現を可能にしてきた。

しかしながら、個人主義を前提とする風潮の横行する世の中で、一般大衆があたかも自己表現の一つとして、他者との相異点のみを鮮明にする自己 (個性) を語る現代人の個人主義は、他者との協調関係を前提にして実現したはずの自由主義的基盤を、極端なまでに後退させてしまっている。「あらゆる価値の相対化」の過程があつてこそその自分であるという意識は、また極端なまでに希薄なものとなり、独善的自我の追求を個人主義と曲解しているかのようである。

独善は欺瞞を生み、欺瞞は不信を呼ぶことを知る必要があるだろう。社会は「空虚な移ろいの時」を経験し始め、断片的価値の瓦礫の趣味的愛好への時代へと加速度を増して変貌してゆくかのようである。

来たるべく90年代を前に、80年代の今日、卓上のマイコン、パソコン、ワープロ等の価格減下競争によって、企業を始めとして、あらゆる職場、学校、病院への普及がめざましくなっている。そして個人用機種としても大きな需要を生み出してきている現状は、あたかも、「マイコンやワープロ」を使用できぬ人たちは時代遅れの人たちであるというレッテルすら貼り付けられそうな勢いである。

それだけに経済、金融の分野では伝統的方法が大きく組み換えられ、生産、流通、金融シ

システムは改良につぐ改良を加え、通信の分野では「光ファイバー」を使用する「秒単位」の情報交換が可能となってきた、大きく未来社会へ前進している。とはいえ、こうした新技術が絶え間ない科学的発見と応用の成果として登場し、市場（というより全国民的規模で）社会を席捲した後の状況は、すべてのものが数式化し、数量化されてゆく社会となり、すべて計算され（人間の思惟能力すら）、意図され、予定され管理可能な人間社会を創り出されることが確実なものとなる以上、「自然人への渴望」こそが、人間に残された生活願望となる他はないであろう。

高度科学文明が社会発展に貢献した最終段階で、人間が第1に希求する生活願望が「自然回帰」であるということは、大いなる矛盾を与えるわけであるが、人間の持つ理性が来たるべき時代の包含する危惧を予感する以上この矛盾を止揚しうる社会を実現してゆく必要がある。

確かに言えることは、こうした状況の激化する過程では、「人間の篩落し」とも言える現象が出現し、「イン・サイダーとアウト・サイダー」の分化傾向が増大するということであろう。その意味において今日の状況は、日本に限定してみても、歴史上稀にみる時代であるということを確認ざるを得ないであろう。

流行という現実の抽出と将来の予見誘因は、時代の証言者としての位置を占める以上、この動向を冷静に見つめ、それを分析する事が現代社会と未来を解く鍵となる。今、「一つの文明の終末を、それと意識しながら生きるのは奇妙なことだ。ローマの末期くらい、こんなことはなかった」（「アンドレ・マルロウ」p. 378）と語るドゴールの言葉は、不気味な余韻を残しているように思えるのは考え過ぎであろうか。とはいえ、日本の場合は西洋の理性の哲学によるよりも、一般大衆の感性を基にした社会哲学の出現が望まれるのである。

### 3. 人間類型の変遷について

この章においては人間類型と称される人間の基本的行動様式の変遷と、時代変革がもたらす人間類型への影響といったものについて若干の省察を試みることにする。

今日まで、「歴史」というものが把握しようとしたものは一体何であったか。歴史学の継承し続けた関心事は何であったのか。それは「人間」であり、人間たちの行動諸結果がもたらした時代変革への対応の意義とその影響の事実の解明であったと言えるだろう。

時間はその性質上連続的なものであると同時に、また不断の変化でもある。そして、その時間の中にもヒューム・ボナールの言う「少なくとも何らかの変らないものがあり、それは人間である」という確信は生き続けている。それ故に歴史の中における人間描写は、過去と現在との不断の総合を前提に開始されねばならない。ただ「現在に、現在的なものに満足しようとするものは現在的なものを理解しないだろう」（ミシュレ）という提言は歴史研究に欠かせない態度のあり方を示していると留意すべきである。

以下において、今日に至るまであらゆる分野で提示され、伝統的な人間類型としてあげら

れているものを考察の対象として、今日的観察を試みてゆくことにする。論者によっていくつかの分類が存在するが、ここでは基本的な行動特性をもつと思われるものを、旧新（各4例）を挙げる。まず旧類型としては、

- (1) ホモ・サピエンス（知恵のある人）
- (2) ホモ・ファーベル（ものを作る人）
- (3) ホモ・ルーデンス（遊戯する人）
- (4) ホモ・オランズ（祈る人）

がある。

人間の行動特性を普遍的な現象や歴史的経験の中から抽出し、人間本来のあり方を再認識させたこれらの類型は、今日現実の変化に対応して、その伝統的価値を変貌させてきている。そして正に現代は高度産業社会として新しいタイプの人間を創造して、次のような人間類型を誕生せしめている。すなわち

- (1) オーガニゼーション・マン（組織的人間）
- (2) オートマトン・マン（自動機械的人間）
- (3) ホモ・コンシューメン（消費的人間）
- (4) ホモ・メカニクス（機械的人間）

がそれである。

社会が高度に機械化されるに伴い、組織形態は合理化を増々推進させ、人間を主体の地位から客体のそれへと移動させ、生産物製造機械の作動・操作の適正を維持すべきものへと、その存在を化している。あらゆる伝達手段が、機械化、システム化され、人間の思考様式それ自体も、何ら独創性を要求されることなく、ただその場その時における条件反射系の働きのみが重んじられるようになる。その結果、高度分業化した産業各分野での企業人は、それぞれ独自のタイプ人間を育成する集団となっている。管理され、支配されることに対して拒否する感覚は薄れ、自らの職業や生活に何らの異和感を覚えることのない精神状態を保持してゆける現代人の生活意識は、本能部分（生命の維持・種の保存・肉体の行動欲求）等の反映であった伝統的価値規範を今やまったく喪失しているように思える。

現代は長い歴史上、文明の発達と文化の向上が極端な程、人間存在の尊厳の認識を回避している時代であると言えるだろう。目的よりも手段、手段よりも行動（現象）を評価の第1とする社会の風潮は、自失への道を歩んでいるとしか考えられない程、すべてを変貌させている。

たとえば歴史的時系列の中から一例を抽出すると、ロマン主義が国粹主義と結びつき、時にファシズムへの地ならしとなったドイツなどの事例は、めずらしいことではない。かつて、マルク・ブロックは「歴史の弁明」の中で次のように歴史を規定している。「歴史は表面的な事実の背景に分け入り、伝説や修評の誘惑の次に決りきった考証や常識に変装した経験論という今日一層危険な毒を投げ捨てるのに苦労している。歴史はその方法の根本問題のある



ものに関しては、初期の暗中模索の域をまだ脱していない……歴史はあらゆる学問のうちで最も困難なものである」(XV)。

そしてさらにその歴史の究極目標について「歴史が把握しようとするのは、人間たちである。そうすることのできない人は、せいぜい博識の未熟練労働者にすぎないだろう。良い歴史家とは伝説の食人鬼と似ている。彼が人間の肉を嗅ぎ出すところ、そこにこそ、獲物があることを彼は知っているのである」と言及している。(p. 8, ……点筆者)。

歴史はこうした主目的の故に、歴史家を現在と過去との事物の連動に駆りたて、その成果が、また市民の現実認識の礎となり得たのである。しかしながら、現代という今日社会は、市民から過去の出来事の連鎖より得た知的経験の遺産を放棄させんばかりに、未来への好奇心、一般的流行対応のみを急がせる。

歴史に期待する恩恵についてライブニッツは「過去の事物の中に見出された事物の起源」をあげている。というのは、我々の日常（現実）はその原因によって始めて最もよく理解されているからである。古典復興が不断の創造を生み出したことは、科学史、芸術史などを通覧すれば瞭然であろう。しかしながら、こうした経験的思索は、まったくその現実認識のための歯止めを失ったかのようである。かつて「本質は抽象であり、現象は具体である」といったテーゼは、あらゆる思索の知恵の一つであり、学問研究の態度を示唆するものであった。しかし、現実の結果としての成果を求めることに性急で、そのみを評価の対象とし、規準とする。それ故、ことに我が国の社会生活では個人評価は、業績の減点方式を採用することにより、積極的な自己能力の開示・実現を期待するに困難な状況となっている。

それはさておき、個体発生は系統発生を繰り返し、種の保存を続けながら時代を形成してゆくものであるが、人間もまた同様である。考える葺としての存在から出発した古代社会から今日までの人間能力の集積は、科学技術の強威的な発展によって、かつての宿命論的弱者の面影を一掃してしまったかのようである。とはいえ「彼らの父祖よりも、彼らの時代に一層類似している」(M・ブロック)とされる今日の人間の究極目標は、変化したといえるだろうか。近代社会の成立以降、民主主義社会は個人の立場を尊重し、一対一の平等対応を約束した。それがために、すぐれて個人的であり、普遍的でもある人間存在の態様は、時系列の中で手段と行動の差こそあれ、その目的とする現実の自己の生活を豊かにするという価値志向は、そのこと事体継承されているように思える。

さりとて、故事にあるごとく「良き耕作者は、収穫と同じ程度に耕作と播種を愛する」を実践基盤とする人が、少なくなりつつあるのは、現代人の行動が一挙に多様化し、標準化してきたことによって証明されるだろう。「It is not mere life, but a good life that we court」のような言葉すら、単に文字の上の言葉と化して、俗事への浸透を余儀なしとする日常生活の選択とその反復は、人間の悟性としての理解しようとする性質を、単に知るだけの領域にまで後退させ、しかもその知識すらまったく独立生起した断片的知識と化してゆく。

あたかもニュースを見聞きする行為が、その一瞬の後に、先の事柄を忘却しているように、本人にとっては単なる情報となっているのである。ここに現代の非情さを抽出することのできる要因の一つが存在する。つまり、一過性の現象認識の習慣が出来事の重大さを平準化し、傍観者の地位を享受するからである。

「遊戯は今日我々に許されなくなった。たとえそれが……知性の遊戯であろうとも」とするジッダの言葉すら、現代はその意味世界を限りなく解体してしまうかのようである。

加藤周一氏は、「芸術論集」の中で技術について次のように言っている。「高度の工業化はまた技術的文化と結びついている。技術的文化はそれ自身に個有の価値の意識を生みだしている。技術は進歩する。技術的文化の支配的な社会では、進歩のめにみえるものが、価値とされる。技術は目的をつくり出すものではなく、あたえられた目的を達成するための手段を洗練するものである。手段の洗練は、合理化と計量化の傾向を含む。技術的文化は、合理的な量の文化である。技術が追求する目的は、多くの場合に便利安楽である。技術的文化の支配的な社会は、また便利安楽へ方向づけられた社会である」(p. 152)。近代化の進展はまさにこの方向に一つの目的を達成してきたと言えるだろう。

豊かな社会の実現は、個人から集団意識を拭い去り、いまや「Me-ism」を生むまでになり、またこれが可能なほど個人的生活の基調を整えているのである。官僚制機構の徹底と、その反動として表出したヒッピー化現象は、個人の意識変革をもたらすところとなり、いわゆる体制のインサイダーをアウトサイダーへと流出させる結果となった。「傍観者の時代」といわれる現象は、国家体制のあり方を、あたかも競技場での少数プレーヤー（政治家・行政家）と大観衆（国民）のごとくに分極化たらしめているのである。この場合、プレーヤーたちの行動に関する命令系統の集権化が絶大なものであればある程、訓練され統率された集団の行為・行動は水際立ったものとなり、プレーの興味を倍加する。

しかし、通常の間人社会では、あくまで諸個人の自由選択領域が絶えず見い出されなくてはならないのである。平等だけが保証される社会では、発展は望むことはできない。自由が約束されている社会にあって初めて、完全競争が成立する。

技術文化の進展は、一方では成熟社会へのパスポートを発行しながら、他方では増々幼児化現象を惹き起こし、社会の精神年令を引き下げている。こうした社会は、危険な要素を孕んでいる。つまり少数エリートたちが、完全に多数の人々（国民）を支配できる可能性が存在するからである。官僚制社会の進展は、庶民を政治離れさせ、若者層においてはそれは無関心の表現として極に達する。しかし、政治体制の維持存続の建て前から、政治家と官僚集団が表裏となって政治を代行するゆえに、政府は必然的に高価なものとなり、庶民の生活の上に重くのしかかってくる。意思の疎通なき行財政機構のあり方は、一面において技術文化の持つ正の給付を受け入れること少なく、逆に負の給付を多く受け入れる。つまり、技術・機械の制御、使用によって時間と労力が、驚くまでに省力化され、伝信経路が身近なものに発展したにもかかわらず、人々の間の以心作用は、意味不明なものとなり、共感現象を享受

しない物化人間を創出し続けたのである。

それゆえに旧来の社会的価値観は、戦後の価値混乱期程急激な変化を辿ることはないが、序々にしかも確実に規範放棄の現象を呼び起こしている。中心<sup>・</sup>的<sup>・</sup>価値<sup>・</sup>の<sup>・</sup>喪<sup>・</sup>失<sup>・</sup>が<sup>・</sup>叫<sup>・</sup>け<sup>・</sup>ば<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>て<sup>・</sup>から<sup>・</sup>久<sup>・</sup>しい<sup>・</sup>が<sup>・</sup>、現代では中心となる価値体系の実践は、もはや「祭り」といった行事の中での人々の関りにしか、典型的に見い出すことができなくなっている。善悪是非の観念は、具体化された行為の前でしか知らされず、教えられるという受動的行為の中では、単なる知識の断片と化している。

最近の若年層にみる大人社会への反乱は、一つの時代の警鐘であろう。他者への思いやりを自己の行動の規準とした行為様式は、今や完全に自己優占の行動へと転化し、人間を思索的動物から、行動による結果評価型人間へと変貌させようとし、興味あることに、若年層の一種の無責任行動のブームは、大人たちにまで広がっているのである。規範人たる大人が、幼児化社会の中で「価値喪失」を繰り返し行ってきたことによって、自らを子供と同等の存在へと転換したかにみえる現実、不気味なものである。

かつて、ギボン<sup>・</sup>は<sup>・</sup>ローマ帝国衰亡史の中で「繁栄は衰亡の本質を成熟せしめた」と言っている。古来より栄古盛衰は世の常、人の常とされ洋の東西を問わず不変の真理の一つとして、人々の社会観、人生感の根底部分を形成している。いわゆるテーゼに対するアンチテーゼの繰り返しによって、時を経過させる人間意識の伝統的把握形式は、現代まで継承され、今後とも引き継がれてゆくものと考えられる。

その代表の一つが平和に対する戦争であり、善に対する悪概念である。一例をあげれば、本朝の場合、驕る平家も一朝風前の塵となったのであるが、今少し詳細にこの変遷過程を考察すると、次のような循環形式が出来上る。つまり、平和は富を生み、富はより多くの富を求めることによって、競争をもたらす。競争は支配関係を作り、支配関係は必然的に強者の論理の実現を志向する。この道はやがて驕りを生み、驕りは怠慢と狂気を育て、戦争へと導く。しかし戦争は悲惨と共に絶望を教へ、絶望は人々に当為性の重要性を認識させ、やがて身近な生活内での共同関係を生み、謙虚さを復活させる。復活した共同体は、序々にいわゆる社会契約を浸透させ、平和裡の社会・国家を創造する。といった次第である。

歴史の中にある基本要因としての社会・組織・集団・技術・文化といった人間集結の諸要因を考察する場合に用いる概念としての進歩・発展概念は、通常生成——発展——衰退という循環形式を辿る。生物進化の過程の中で発見された公理として有名なものとして「個体発生は系統発生を繰り返す」がある。この過程の中で、進化論の形成の端緒が、蓄積され、実証される。すべては一つの大きな時の流れの中で、それ自体の生成本能の命じるがままに活動することによって、時異な現象を露呈する。それ故に、未知なるものの発見・発明は、既知の知識の検証過程の内に見い出されるのである。

ここにおいて、人間の過去の集積を自己の経験と照応させることが、すべての探究過程を通じて行われる思索の意味となる。マイヨールの「私は自分の思念（イデー）」を形に現わ

そうとする」という言葉は、存在する自我そのものが「形」となるということを指し、これは丁度パスカルの「自我における自我の認容」と同義である。

人間の思念が究極において「形」すなわち思想を生み出し、そこにおいて人間は「形」が法則と調和によって成り立っていることを理解する。そしてこの形こそが、人間の経験の集積として普遍的価値を持つ文化である。

ただし、問題は「自分の中に確かに世界があると認識し得る人のみが思索を許される」ということである。科学と宗教の目的が同一の過程の中から分化した後、補完的な役割を相互に担うようになったことは、理論という合理的思考が優占し始めた17世紀以降の歴史の証明するところであるが、現代は今この審議未了の問題を審議する段階であろう。

#### 4. カオスの功罪

「「イデオロギーの分析はインテリゲンチヤの論議に、当然属している。知識人とイデオロギーとの関係はちょうど聖職者と宗教との関係のようなものだといえる。このこと自体、その言葉の次元とその多様な機能の根拠とを解く手がかりを与える。イデオロギーという言葉は18世紀末に、フランスの哲学者デスチュット・ド・トラシーによって作りだされた」（ダニエル・ベル、「イデオロギーの終焉」 p.253）

組織とか秩序というものは、ギリシャ人・ローマ人の基本観念を継承するものであるが、古代ギリシャ人は「無限」とか「無限の空間」といったものを余り考えなかった。その証明は「ギリシャ建築はなぜ塔をもたぬか」ということに尽きる。それはギリシャ芸術では「人間がすべての尺度」となっているからである。建築の場合においても、「すべての量は人間が把握できる限界をこえない」ことを前提にしている。それだけに法則と制限の芸術としてギリシャ神殿を典型に構築されているのである。ヨーロッパ文明は(1)ソクラテスを代表とする古代ギリシャ文明と(2)キリストを代表とする中世キリスト文明の2つを楨杆とするものである。(1)は人間主義を中核とする理性主義を生み弁証法哲学を発展させ、(2)は信仰による神秘主義を発展させた。しかしこのいずれもが究極に求めたものは(1)は自我の投影としての「神」であり、(2)は存在する絶対者としての「神」である。

今ここでヨーロッパ文明についての考察を進める余裕はないが、この自我の追求こそが人間存在の崇高さを保証するものであることを再認識するための手段として、若干の哲学的概要を述べることは、個人主義の歴史を知る上で欠くことのできないものであると考える。

「理性」が「真理」を求め、その過程が「思想」となり「哲学」を生み、「自我」が生き方を選択させるゆえに「善」価値を第1とし、「感情」と感覚が「美」を求めて抽象することによって「芸術」が生まれる。真・善・美の三価値はここにあらゆる価値に先行する中心価値となって、西欧文明を形作ってきた。そしてこの価値はそれぞれに「絶対」を希求するがゆえに、「神」に出会うのである。そしてついには、真の神、善の神、美の神となる。西欧

芸術の伝統は、この三価値を追求することにある。

哲学に限っていえば、プラトンの「イデア」とアリストテレスの「実証」は、デカルトとパスカル、ゲーテとニーチェといった具合に継承されている。もちろん20世紀に入ってもヴァレリー、アラン、ロマン・ロラン、サルトルといった哲学者たちの行動はその伝統的な実証合理性を継承しており、我国の哲学者、文学者、文芸評論家たちは、大きな影響を受けたことは周知のことであろう。

ヴァレリーにみられる「私は一生自分をしか考えなかった」とする姿勢は、まったくギリシャ的人間主義の上に立った伝統的「自我」の思想であり、「自我」の投影であった。そしてまたアランの言うように、哲学とは「不断に思索すること」であり、「物象なしに思索しない」「思索とは行動である」とする基本姿勢こそ、西洋哲学の思想の根底であったのである。「デカルト批判から始めフッサールの方法を用いて実存主義を発展させながら、ついにマルクスとレーニンに近づいた」(加藤周一、芸術論集、p.106)サルトルの「存在と無」などを想起すれば、現代のわれわれにはヨーロッパの伝統的な哲学の姿勢が、現実との拮抗関係の不断の行動であることが理解されるだろう。ただ「不断に思索すること」と「人生観を持つこと」は違うのである。西欧人の場合、思索するということは、意識の経験集積の中にある実証的合理性が含まれるのに対し、日本人の場合は、思索がきわめて情緒的、かつ無常感に支配される傾向がある。その典型は宗教においても著しく、西欧の唯一神的思想に対し、日本では汎神的思想となっている相異である。日本人の情緒の根源が「自然没入」の中に見い出され得るところに、日本人の哲学的態度の不徹底さがみられる。

日本人の文学的趣向の基をなす源氏物語にみられる情緒的無常感は、今日の我々の思考と隔離はないと思われる。つまり、その心理的移行型として、先ず「あるがままの時の流れ」を体験してゆきながら、「なるようになっている(肯定)」として解釈し、次に自己の立場から「なるようにしかならない(否定)」と受け止め、これが諦めにも続き、終には無常感を是認する思考形態が普遍的なものになっているのである。ここに日本人の思考、行動の最大の特徴が集約されている。

今日の社会にあって、日本人の特徴を抽出する場合に、よく例証される集団内の人間関係があるが、集団内の人間関係に先ず必要なもの、つまりその前提であり、終極の目的は、依然として「和を以て貴しと為す」とする聖徳太子の教へである。ただ太子自身の人生感は「唯仏是真、世間虚仮」であったのであるが。それはともかくこれに対して米国の企業では、「シンボリック・マネジャー」(テレンス・ディール、アラン・ケネディ著)によると、企業の成功の秘結は、何よりも「強い文化的信念(スローガン)の有無」が決定するとされている。その文化の要素には5つあって、(1)企業環境、(2)理念、(3)英雄、(4)儀礼と儀式、(5)文化のネットワークであって、日本的経営のように縦型の支配関係を前提にしたものではなく、労働者自身も、「こうすれば君も成功者になれる」という方針を前提とする横型の協調関係を打ち出しているところが、決定的な相異点である。あたかもパートナーシップをそのまま

企業内に持ち込んで、M・ウェーバーの指摘する経営(Betrieb)の概念の「一定目的に向って合理化されている諸行為の技術的な統一性」をそのままに実践しているかのような感慨を覚える。

一方、日本の場合は個人の自由意志や、その表現の軌跡としての能力(個性)の発揮より、集団という抽象的価値実態の優位性は、絶大なものであり、またそれだけに「和」は、今日一部の集団組織(西欧化された信念を実践する組織や外国企業系列のもの)を除き、企業人、家庭人、教育関係者、政治家たちの間で、最高の価値、集団安定秩序維要因として公認されている。またそれだけに、この価値を否定しようとする者に対し、制裁手段を講じるやり方は、絶妙を極め、反逆者として社会的に追放してしまうことが、企業間では暗黙の了解事項となっており、他の集団内でも大体同様の措置が採られているようである。

現代社会の持つ価値体系は、依然として集団組織の支配原理の完逐であり、個人の価値自由の原理ではないのである。日本の場合はこの認識からの離陸(Take-off)は、望むべく目標とはならず、不可侵の原則として遷法してゆかねばならないものなのである。

ただ、そうは言ってみても、こうしたことへの抵抗感は西欧人と比較して、驚く程に少ないという点も、また見逃がしてはならない特徴の一つである。

個人主義、人間主義を前提として営まれる文化成熟社会は、わが国の場合現状では、括弧つきの社会であり、その範囲内での自由となって、集団組織の一層の徹底を促進し続け、管理体制の浸透を受容し続けている。

「進歩的思想とは自由を要求する階層の側に立つ思想だといえるだろう」(加藤周一、「現代ヨーロッパの精神」という主張は、今なお考慮せねばならないものである。

今日の技術文明、機械文明はその達成手段として、無意識的に近未来社会への移行という共同幻想を楯に、個人の生活を圧倒してきている。光通信、OA,HA,FAの普及は、社会を便利、安楽化を増進させる反面、対自、即自の思惟の経験を一掃し始めていることも考慮しなければならない課題の一つであろう。

何故ならば、便利・安楽さの徹底した社会は、その生活の安寧を保障する反面、社会を成熟社会へではなく、幼児化社会へと変貌させる危険性を保持しているからである。一部の専門家集団の既製の商品を、その性能、構造を知ることなく操作し得る現実、テクノクラートの支配社会そのものであるからである。動かすだけしか知らない車、点滅方法だけしか知らないTV、その他の家電製品など、便利さの極ではあるが、一度故障すれば、無用の長物と化すやっかいものであることは、日常経験済みの事態である。

しかし、修理能力を持たぬ以上、また修繕への意志すらも放棄させられている以上(製品の構造が余りにも微細なために、例えばマイコン等の使用にみる半導体構造は専門家しか理解できないため)、どうしようもないことは、これまた経験済みのことである。他者への絶対的依存関係なくして、生活し得ない社会の一員としての徹底した生活形態は、もはや変えようもないところまできてしまっているようである。

かつての生活の基本であった自給自足の形態は、今や完全なまでに崩壊し、他者依存関係は、完全なまでに完成し、経済的な繁栄の下に、人々の日常の意識や生活意識、思惟経験すら変革してしまったかにみえる現実、やはり不気味なまでに肥大化してしまったと認識せざるを得ないのである。

## 5. 終 章

### ジャパニーズ・マネジメント

近時、日本的経営について多数の識者による特徴の抽出が試みられているが、その中から概ね共通する事項について整理しながら、若干の検討を加え終章とする。

先ず第1に、最近とみに日本的経営の成功についての調査・研究が米・欧の企業・大学関係者たちによって始められ、その翻訳書があたかも洪水のごとくに出版されている現象を特記しておく必要があるだろう。「Japan as No. 1」に始まる日本的経営の概要、換言すれば日本の企業文化の核を形成する「社風」意識の連鎖が、世界的に紹介されることになり、それを契機にして、その反映として改めて広範な調査を基とした日本人学者・企業者による「日本的経営」の特質の検討が重ねられ、今日、一応の共通事項が確認されることになった。

こうした一つのブームとも言える動向の契機は、何と云っても70年代初期に始まる、ドル・ショック、石油ショック以後の日本企業の経済的対応のうまさがある。いわゆる「減量経営」といわれる経営方針の徹底によって、予測される不況を脱出・回避した日本人経営者の手腕は、米・欧の経営者の眼に強烈な印象を残し、一種の鮮明な光明を与えたかにみえる。もちろん、こうした成功の一面には、MITI（通産省）の介入があったことは見逃がすことはできない。ただ、諸外国では、こうした企業経営への国家の指導はあまり歓迎されたことではないとする批判もあったことも事実である。

しかしながら、こうした日本の対応の迅速さが、その反映として先に述べた日本的経営 (Japanese Management) への関心となったのである。日本的経営の特質についての一応の見解は、(1)組織原理としての年功序列制、(2)労務管理対策を兼ねる終身雇用制、(3)管理運営上の稟議制度などが主たる槓杆をなし、その他として、(4)就業労働者層の高学歴化、(5)日本人の特性の基本をなす勤勉性などが、一種独特の「社風」を創出し、「組織人」(オーガニゼーション・マン)を生み出している点が、他国の企業形成原理と異っているとされているようである。

ちなみに、こうした制度の普及する土台は、やはり日本人の行為様式、換言すれば日本人そのものの特質の集合体として企業活動が営まれている点にある関係上、日本的経営の特質解明の研究は、必然的に日本人論へと大きく展開せざるを得なくなっているようである。それだけに研究の対象は限りなく、日本の歴史的背景に裏付けされた日本人論を展開せざるを得なくなり、これが各企業研究・商人研究などの諸作となって、全体像の確立への布石となっているのである。

外国人が見た現代日本の経営者像に、日本人の手による日本人研究の実証的裏付け、いわば「状況人」と「価値実体」としての経営者像の融合が、今日、一番求められている研究対象となるだろう。

(了)

本文作成に際し参照した文献のうち主要なものだけを以下に記載する。というのも、そもそもこの論文は、以前から書留ておいたノートを基に、昨今の社会の状況について現段階において一応の私見を整理すべく作成したものであるもので、本論の基調をなしていると思われる思考・方法を触発させた文献だけを記しておくことにする。

### 参考文献

- 1) 高坂正堯, 「文明が衰亡するとき」
- 2) ダニエル・ベル, 「イデオロギーの終焉」
- 3) 山崎正利, 「柔らかな個人主義の誕生」
- 4) テレンス・デイール「シンボリック・マネジャー」  
マラン・ケネディ
- 5) 伊藤 整「近代日本人の発想の諸形式」
- 6) J・Hプラム「過去の終焉」
- 7) マダダ・レヴェツ・アレクサンダー, 「塔の思想」
- 8) 高田博厚, 「思索の遠近」
- 9) 加藤周一, 「現代ヨーロッパの精神」
- 10) E. J. ホブズボーム「資本の時代」